



利根川圖志

一

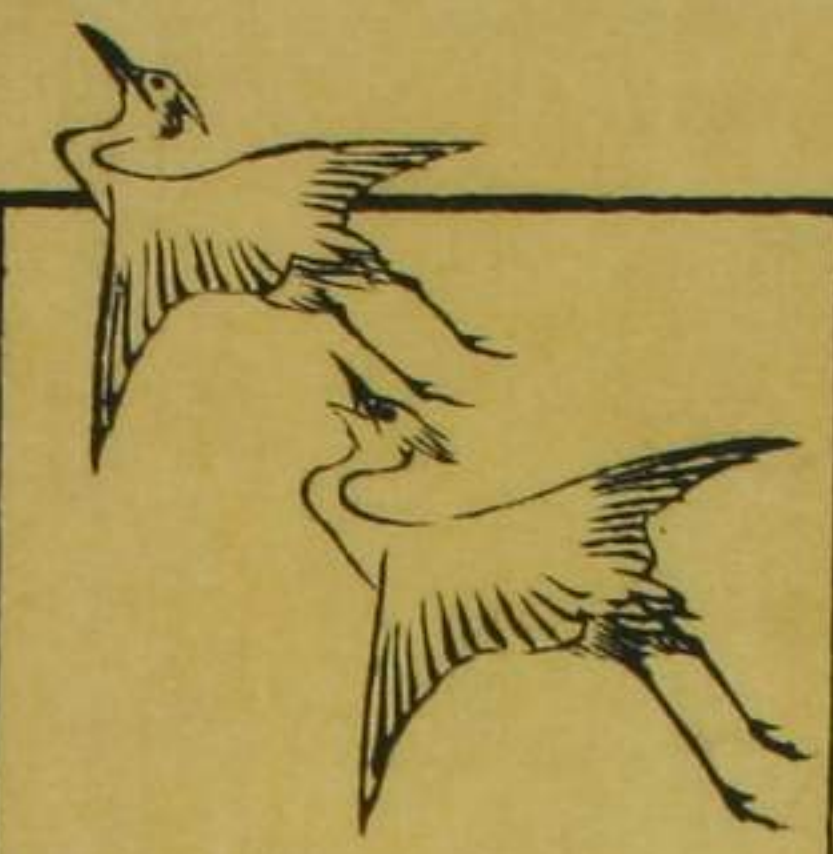
ル 4
E317
1





利根川圖志

赤松宗旦著



利根川圖志序
右の漸國如くありて
ありて海に流るるや
我を赤松宗旦如く
此の利根川國志
久ししと云ふ也
此の利根川國志
ありて海に流るるや
我を赤松宗旦如く
此の利根川國志

序

あつて佛に物さへさすのゆゑに
さす者らも子もさす名もあはれ
あつて古時此のくはるを流るる
岩を流るるさるる常さつた
よき事なりとて
見えらるる様もさす
あつてさすなりとて
あつて——

あつてさすなりとて
名の者もあつてさす
程のさすなりとて
あつてさすなりとて
あつてさすなりとて
あつてさすなりとて
あつてさすなりとて
あつてさすなりとて
あつてさすなりとて
あつてさすなりとて

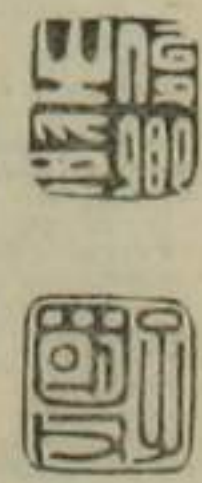
役丁夫一里一亭三里一舍肩之以送踵之
以迎勞可以逸饑可以飽又曰導海舶
於鉞子口運諸印幡沿鑿地為渠通
諸檢見川達諸江戸海可以免東海風
濤之險且沿之近徭可以墾種然亦有四
難曰人力乏也苟多役之則徒為煩冗用
帑難給曰淤泥多也旋掘旋壅曰沙土
鬆也旋積旋崩曰西風烈也歲之颺沙

下流以壅則檢見川亦將有後累也然
此數事皆有善處之法苟有能者將
不難云又曰斷鹿島之沙丘於其寂狹
之處則利根川之水落於鹿島浦乃
通溝渠於十二橋墾田園於十六島凡
此數者皆係利根川之事吾生其徭
不能無感姑記其所聞見以為此書
而如夫數策則興感之曰以冠篇首

其是非則吾所不知故文中不及也且
吾素乏學饒有毀譽之何管馬出門
一笑大江橫

安政二年乙卯季春 赤松義知識

雪城居士後卿書



凡例

この書題して利根川圖志といふ時ハその本源の方より記すべ
き事ヤギあれどそハ余が郷里よりハ遠く隔りたる境にて考察の便
ありけれバこゝにひハ上利根川の下ある房川渡以下赤堀川權現
堂川と分れし處より筆を起し中下利根川及びそれ流れ入る
手賀沼印幡沼等を始神社佛閣名所舊迹物産を記し銚子浦を終
るその間記載すべき者甚多し脱漏亦少からず故に拾遺の舉あり
り以てこれを収めむとす希ハくハこの書を看む人各その家牒ケイテツ
舊記及び考説詩歌等を齎し來て余が不足を補ひ不到を正し
ハむ事を而して上利根川の方亦繼て筆を起さむとすその考察
不於てハ亦上武諸哲の教を期つ
編中載する所鹿島香取の如き素より大社にしてその典故極め
て多し且前ふ北條時鄰鹿島志小林重規香取志あり又佐原の聞

人伊能穎則が年頃香取の舊記故實を正さむの志あれば大率こ
れ不譲りてその槩畧を識す又守谷將門山等ふる將門の古迹事
實ハ佐原人清宮氏年頃考索して已不上木せむとするの聞あれ
バこの一事ハ彼不譲り又上利根川分流一終不東南して江戸川
と爲る方ハ余が友君塚玄圃下總國千葉郡五田保人年頃房總海邊圖志編述
の志あればバこの一方ハ此不譲りて畧きぬ他日數書成るの後相
照して可かりニの餘記載すべき事多く物産亦少からず今故不
これを脱せる者あり而して又細故俚事を収むる者ハ睡魔を驅
るの用のミ

近來の著書或ハ引用書目を多く一以て該博を示す然れどもそ
の實ハ以て狹を觀す者あり夫古事記日本書紀等の國史萬葉集
古今集等の歌書新撰字鏡倭名鈔等ハ諸書の通引書とすべし又
惣國風土記この書世不偽撰とハハめれど今ハ伴信友が後三國
條院天皇の御時と考へハハへる不因りて記いつ

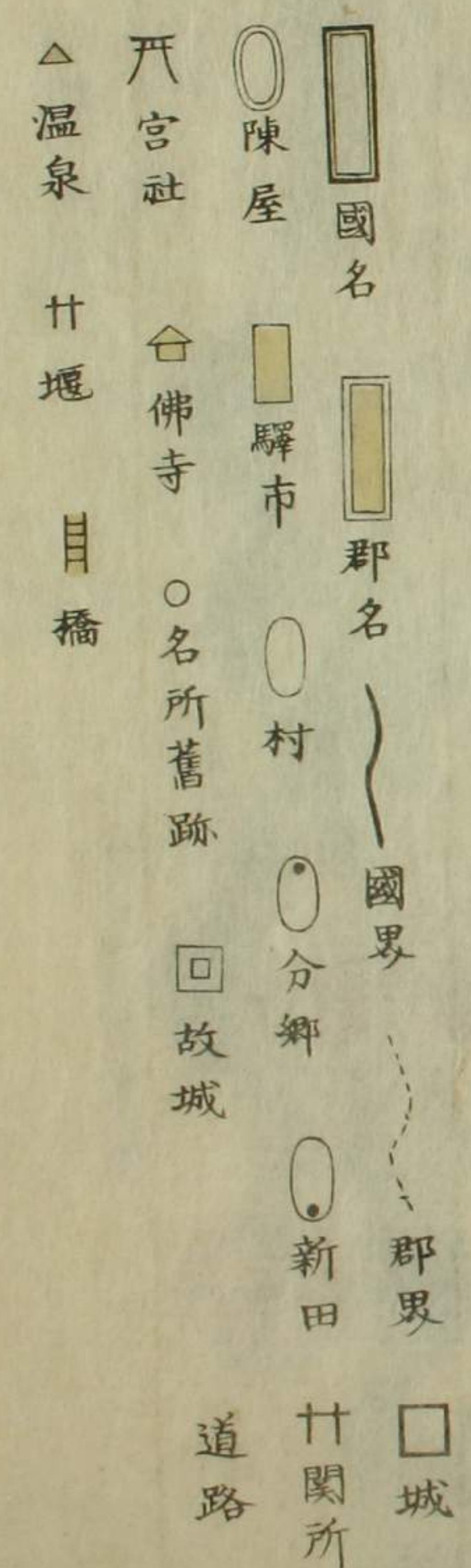
名風土記人國記等の全國を記せるハ雲御抄名所類字和歌集歌
枕名寄等の歌枕を識せる延喜神名式諸國一宮記本朝神社考神
社啓蒙の神社を録せる諸國主齋録の官寺を擧げたる主圖合結
廢城考の城砦を載せたる行囊鈔の行路を紀せる諸州採禁記物
類品隲の物産を説へる諸國名義考の名義を考へたる物類稱呼
の方言を聚めたるこの餘雲根志の石品鐘銘集の鐘銘集古十種
の古物農具便利論の農具前王陵朝記墓所一覽の陵墓諸國里人
談の奇談皆地志の材料ありぬハ無一而して今こ、不主たる書
ハ地志ハ常陸風土記西野宣明訂正本の跋不常陸國志三卷水佐
和銅年間書といへり倉風土記一卷享保七年壬申磯邊昌言著總葉繁録一卷正徳五年
癸未北條香取志二卷天保四年癸未同人著鹿島志二卷文
政六年道名所圖會卷五秋里籬島已不本曾路を記一四卷不盡く卷五
波山不詣り宇都宮を巡り梁田不到る蓋その紀行あり軍記ハ將門記

凡例

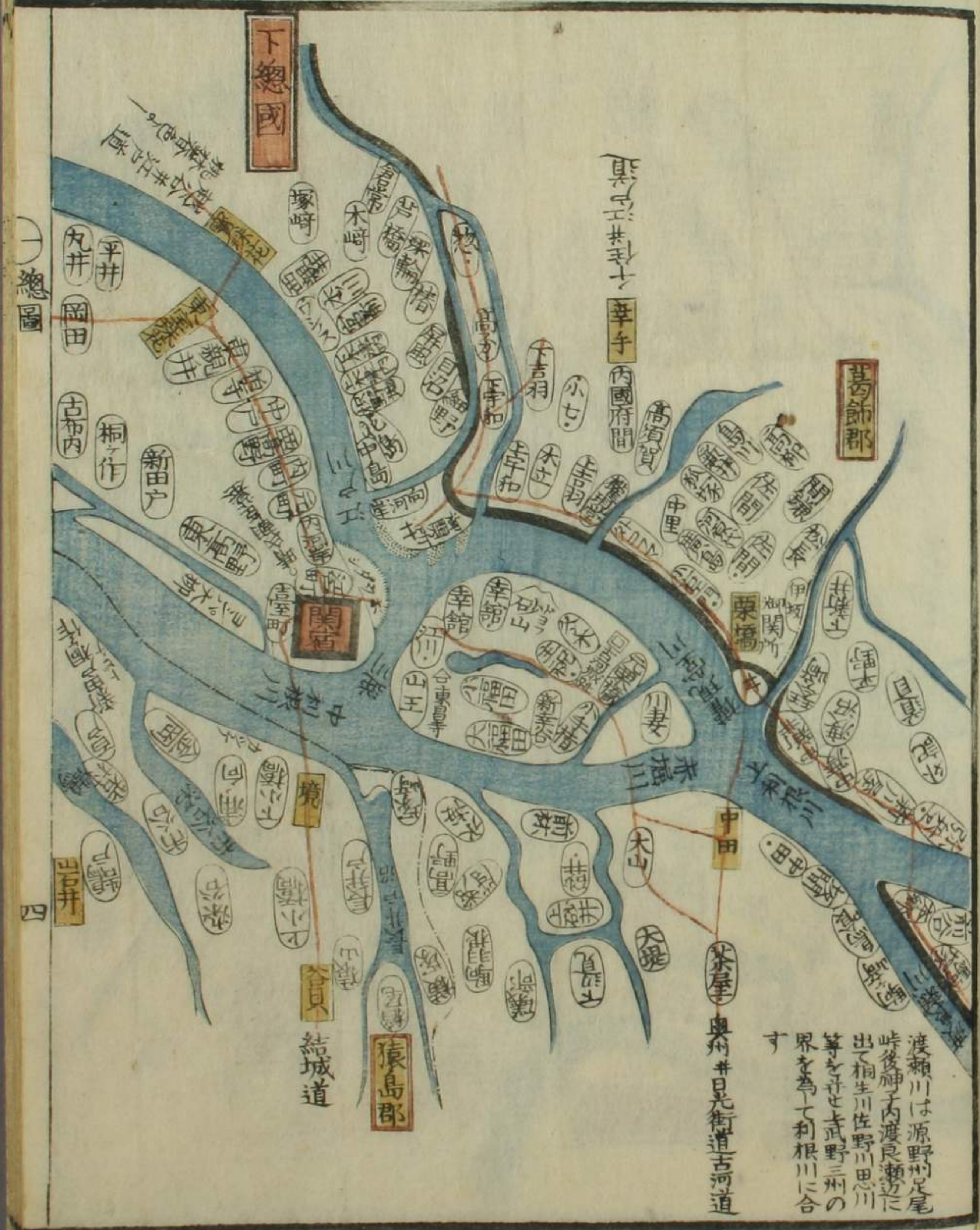
二

大須本端 鹿島治亂記 堀本大永六年暮春漂泊 關東古戦録 四十卷
 本あり傳を校正せし由見ゆ書言字考同作あり自序ふ享保丙午
 著關侍旦と有れど猶考ふべし又別ふ同名の書五卷あり此ハ
 季春朔旦と有れど猶考ふべし又別ふ同名の書五卷あり此ハ
 神説 東國戦記 賀元浪人某下總國相馬郡河原代村に居て著せる
 あり 東國戦記 賀元浪人某下總國相馬郡河原代村に居て著せる
 所か 同一本 臣松好菴相馬郡大房村に居て前書を補訂せる者
 り 東野遺史 關脩齡一名松意漫録 著 紀行ハ東遊行囊鈔卷十八自序
 祿丙子歲八月下旬飛國浪士江間氏親と有り行囊鈔全部百十
 一巻冠するふ東遊西遊南遊越紫遊神風海上の目を以てこれ
 を分つ別ふ遊囊記あり凡紀行の書橘南谿東遊記西遊記 鹿島
 百井塘兩笈埃隨筆等多しと雖周備ニの書不過ぐる者あし 鹿島
 紀行 貞享四年丁卯芭蕉翁作 風俗文 鹿島海道記 戊申仙臺吉村君
 作 鹿島道記 亥一卷 仙臺永八年己又香取日記 一卷 寛政六年甲寅橋千
 て二種ハ 總常日記 二巻 清水常陸紀行 二巻 黒崎相馬日記 四巻 文
 記とハ 高鹿島日記 一巻 文政五年壬午高田與清著 此の外衣手日
 年丁丑高鹿島日記 一巻 文政五年壬午高田與清著 此の外衣手日
 田與清著 鹿島日記 一巻 文政五年壬午高田與清著 此の外衣手日
 未見 航湖紀勝 一巻 藤森弘菴著 六年己自餘ハ香取文書目録 二巻 香取四
 家集 二巻 四家とハ 榊取魚彦永澤躬國澤近嶺椿仲 節善録 田與清

著或ハ省きて二巻と等ふりこの他千葉白井等の譜牒寺社の縁
 一常總夜話と名づく 起下總常陸及び手賀沼印播沼等の地圖等援據する所數ふる小
 遑あらず又巻中載する所詩歌等古今人の集小取る事少からず
 煩を畏れてこゝ小擧げず
 利根川全圖の如き巻中お書流一たれば曲直方位を正す事あ
 たはず多々地名探索のためふ其繁畧を識すのそ
 巻中の面圖名印無きハ葛飾北齋あり

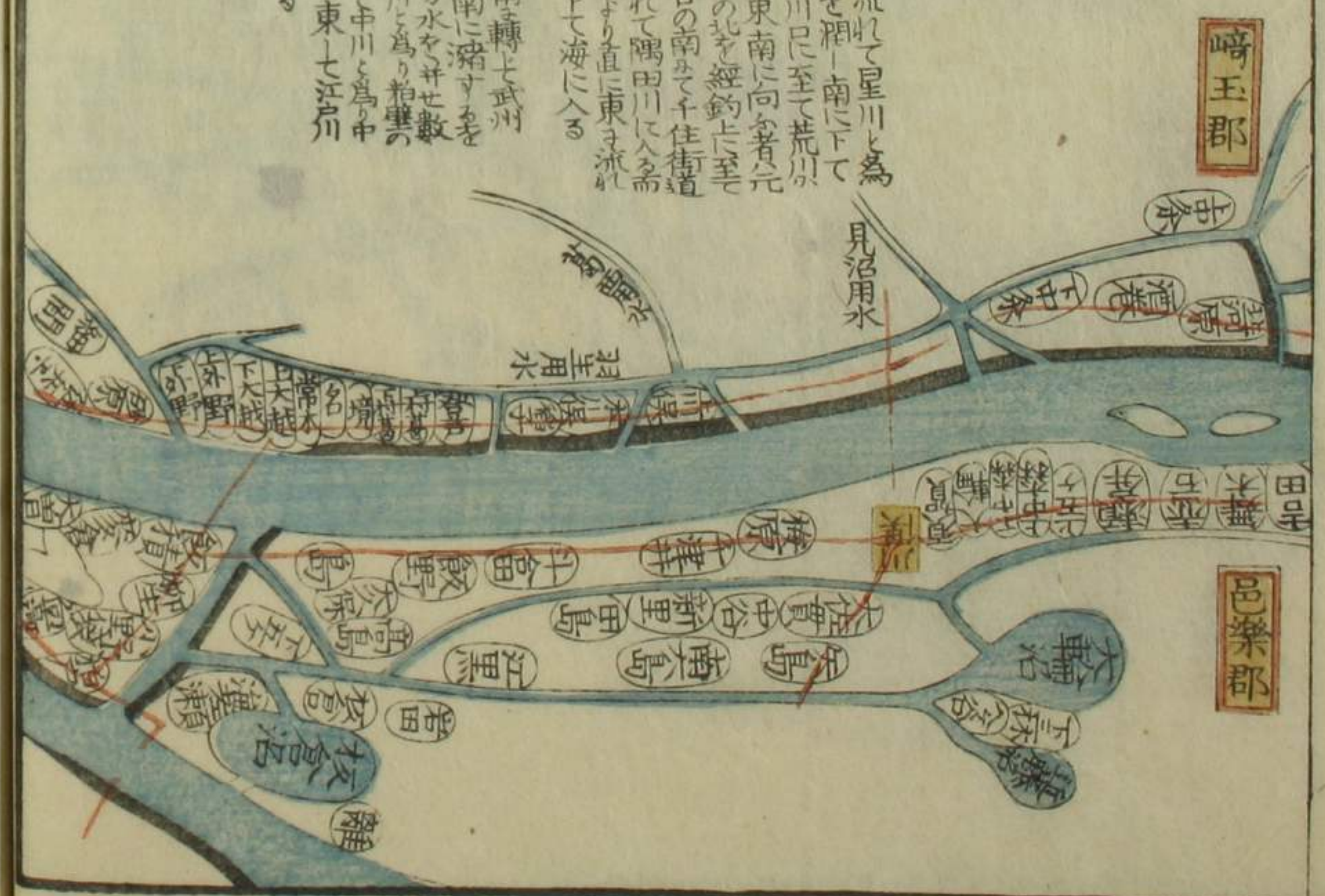


○總圖



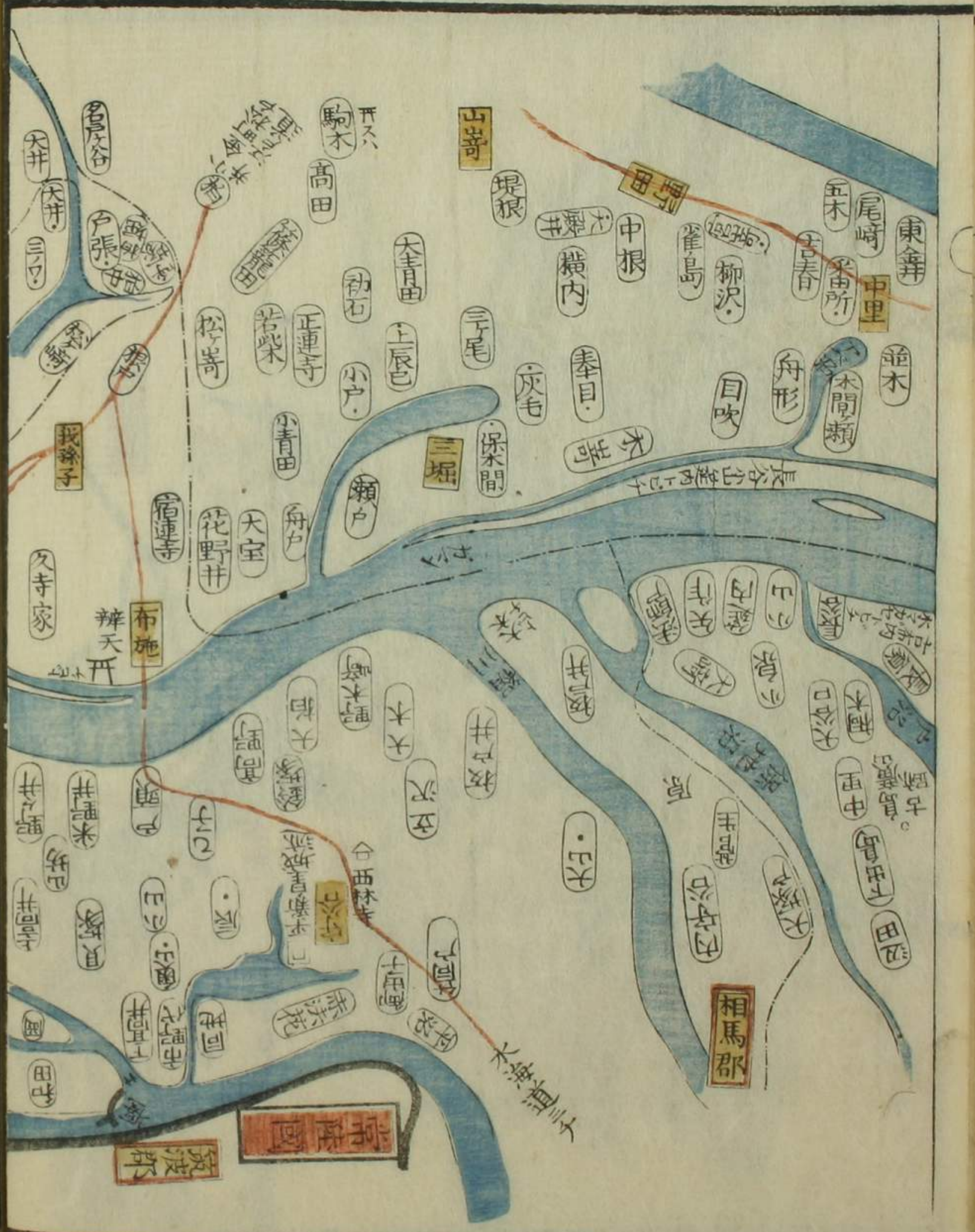
見沼用水、東南を流れて星川と為り、過く崎玉郡の地を潤し、南に下りて足立郡見沼に入り、川に合して荒川を成す。而して本流の東南に向き、荒川を合し、足立郡の北を經り、上に至る。荒川を合し、越谷の南に下り、住吉街道を横き、南に流れて隅田川に入る。一、流の右、槻城より直に東に流れて中川に合し、南に下りて海に入る。

葛西用水、東に流れ、東南轉じて武州の葛飾郡に入り、幸手の西南に流す。其の流、幸手より下り、星川の分水を、并せ、数條の溝池を分ち、合して古利根川と為り、相模の北に下り、住吉街道を横き、南に下り、中川に合して海に入る。而して、利根川、東に下り、中川に合し、堀江新田まで海に入る。



渡瀬川は源野村足尾峠、後藤子内渡瀬、源野に出、相模川に合す。利根川は源野村足尾峠、後藤子内渡瀬、源野に出、相模川に合す。利根川は源野村足尾峠、後藤子内渡瀬、源野に出、相模川に合す。





この處相馬郡錯
在二字と南相
馬とつゝ



一 總圖

五



鉦子口廣田町許宜東北風若風坤
 東舟八不島
 鉦子口ヨリ佐原マノ十里ヲヨリ小堀
 河岸マノ十里
 延内子大屯 関原六里
 中臺五六里 杉子四里半
 二江子四里 長橋五里
 合五十一里半
 鉦子ヨリ舟路
 常陸國府中マノ十里許
 上浦マノ二十里二十四町
 養津マノ十八里
 那珂馬マノ二十里
 安房國小湊マノ八里



香取郡
 海上郡

浦島郡

上利根川
餘五橋圖
在上州沼田
以藤原正國畫寫之



利根川圖志卷一

下總 布川 赤松宗旦 義知 著

總論

利根川は本源を上野國利根郡藤原の奥ある文殊山に發す義經
三頼朝謀叛事餘隅田川の事を言ふと此の河の水の上ハ上野國利根庄藤原といふ處より落ちて水上遠と記せるハ古今の沿革ハ有れ此の川を言へり又江戶名所圖會武藏演路共
に文殊嶽より出でると言へり此ハ陸奥越後界ひる諸山
の脈故に郡名を以て直る川名とす利根郡の名ハ延喜民部式止
あり故に郡名を以て直る川名とす利根郡の名ハ延喜民部式止
ケレハ利峯ノ義ナルベシト見ゆ猶考ふべし峯多刀祢と書きさる
は固より假字にて義あるにハ非ず此の川志か上野より出て
るが上に古書に言へる所大率上野の方ふれば其の方より筆を
起すべき理あれど余が郷里近き邊の事ども年頃耳目及ぶ限
書集めて持有るを空やハと人の誘めより如此筆を起す事と
爲り故にて猶その源の方ハつきくまものすべき事にむ然

して此の川の能く大を爲すハ細流を擇バざるを以てあり今こ
れを畧説せむ此の川大別して上中下の三利根川と爲す其の
上利根川に入る者ハ赤谷川發知川白根川片科川吾妻川鳥川志
戸川渡良瀬川等あり此の間大約二十八里有奇この下分れて二
川と爲る其の北ある者ハ赤堀川關宿に至り再分れ一ハ逆川と
爲り平時ハ南して江戸川に入る大水の時ハ一ハ利根川の本流
を爲し東流して絹川蠶養川を并すこれを中利根川といふ凡十
六里有奇その南ある者ハ權現堂川關宿に至り逆川を容れ南
して江戸川と爲り堀江に至て海に入る其の中利根川ハ益大なる
りて以下南ハ下總の手賀沼印幡沼長沼等を并せ北ハ常陸の大
浦霞浦浪逆浦を容れ廣八百七十間許の大江と爲り凡二十里餘
を經銚子口より海に入るこれを下利根川と謂ふ高小流のこれ
不入る者數ふるは違ありすこれ其の七十餘里の流を爲し日本

三大河の一を爲して國雜記標注利根川條は本朝一の大河を
を四國次郎河波の小鳴戸とて坂東太郎と吉野川筑紫三郎筑後川あり
ハ東太三河といへり海内七大河の其一河は筑後川常水の
深川幅時と稱し古より海内七大河の其一河は筑後川常水の
與州北上川奥州といへり山阿武隈川土地を滋潤し魚蝦を生
育し舟楫を通利し人民を裨益する故あり昔桑欽水經を作り麗
道元これを注す本朝尚この撰まざる今不肖耳目の及ぶ所を以
て此の書を作る其の大成ハ後の君子を待つ

萬葉集卷十四上野歌

流伎美可母

二の餘神樂取物歌新勅撰古今六帖夫木集等ハ詠ミ入れざる
歌多かれどそハ皆上利根川の方よりゆづりてこゝにいはず

刀禰棹歌

安達脩

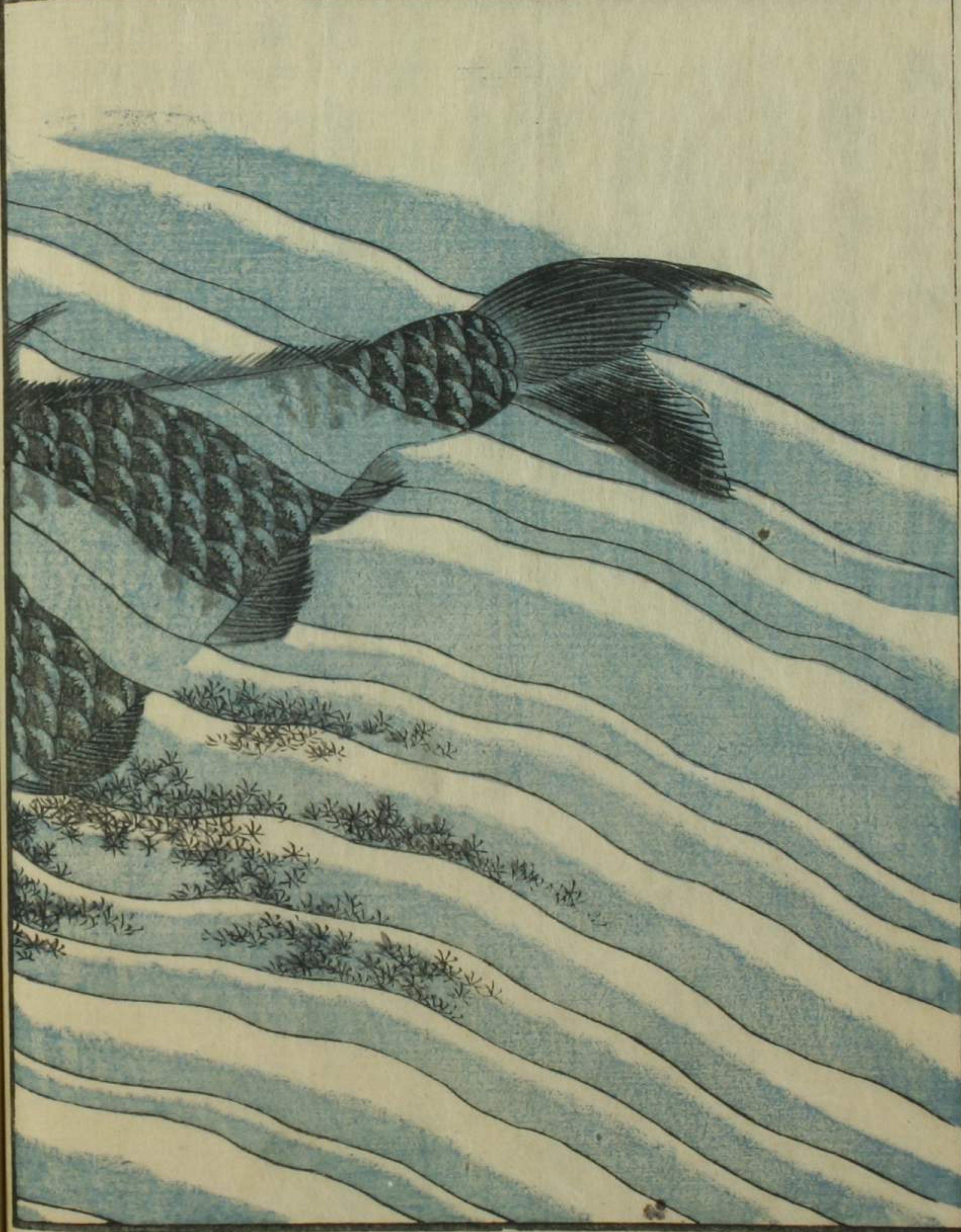
刀禰河邊多緑楊

嫩枝如縷拂堤長

揚帆不管分離思

明日春風入武昌

總論



この餘近世人の詩歌最多大率江戸川の吟あり故に
君塚巖が房總海邊圖志は譲りこゝ、ハ只一首を擧ぐ
夕立や浪を研流す刀祓の音

坂東の一番蛙や太市河
水樹 輕舟

運輸

夫舟楫の利ハ以て不通を濟する物あれバ天下の利器これより
便あるハ無一これ河海の大よ人よ益ある故あり利根川に在て
ハ專航船を用う三代寶録卷四十六元慶八年甲辰九月條は十六
長三丈一尺廣五尺二艘長二丈一尺廣二尺二艘長二丈廣三尺二艘
神泉苑と見え曰く此の船は古事記にあり今案和名抄卷十一俗用高瀬船
艇小深者曰深船深船者深船也音竹といへりこハ今のヒ
と見九小深者曰深船深船者深船也音竹といへりこハ今のヒ
言卷九小深者曰深船深船者深船也音竹といへりこハ今のヒ
ラタとお不し高瀬船ハ深船の製を異にせり年ゴトハ河身の
高才圖會卷三十四は船二艘俗用高瀬船今舟形稍異按京河原流至伏
見呼曰高瀬川其船長二丈余似船といへるを見米五六百俵毎
考ハベし尚高瀬舟の事諸書に見えれど畧きぬ米五六百俵毎
二斗を積む者常あり舟子四人を以てすその大なる者ハ八九百

俵を積む舟子六人を以てす百俵積以下をバウテウ釋名卷七以下
日艇艇也其形徑挺一人二人所乘行者也といへる和漢度量の
差あれどこの字當れり又和漢三才圖會卷三十四は天船あり
物ありといふ急事の備あり舟子一人を以てす公用の船を御用
船といひ諸侯の御手船を御船といひ他の船を以て貢米を運送
するを御雇船といふ雇船あり御船の他ハ賣船あり運賃ハ米百俵
の重を百匁と一薪材をとこれに准へて百匁は銀若干といふ猶
遠近に因て差あり薪材の重ハ船の喫水先銚子口より關宿の上
りそれより江戸に下るを利根の直船といふ荷物ハ大槩乾鰻魚
油あり常陸の北浦西浦より出づるハ米穀炭薪材木等あり印幡
沼衣川上利根川亦同長沼手賀沼ハ入樋ありて船入りす蠶養
川ハ大率竹筏多御用の外ハ舟人字して川盗といふ船を船の
三入るあり考ふべし此の如く諸物の諸物を江戸に輸し更に鹽等を
積みて各處に歸る此の如く諸州の通船一處に湊會して布帆は

運輸

四

白鷺の往返するが如く釣艇ハ緑鴨の來去するに似たり實に利
根川第一の眺望あり
水涸れて河身高き時ハ航船通せず故に脚船を以て運送すこれ
を鰯下船といひ鰯ハ俗ニこれを業とする家を鰯下宿といふ又舟
子少き時或ハ洪水不逢へバ土人を雇ふこれを業とする家を引
付宿といふ共に處々に在り
銚子浦より鮮魚を積ミ上するを龜船といふ舟子三人にて日暮
は彼處を出で夜間二十里餘の水路を洩り未明に布佐布川に
至る特この處を多しとす故にその賑他處に倍一人聲喧雜肩摩
踵接し傾くる魚は銀刀を閃し鉛錘を投げ桃花を散し箬葉を
翻して一時の佳景と稱するに足れり而して冬ハ布佐より馬に
駢して松戸通よりこれを江戸に輸り夏ハ活舟を以て關宿を経
て日本橋に到る以て小民市人の饑を愈し以て公子王孫の祭を

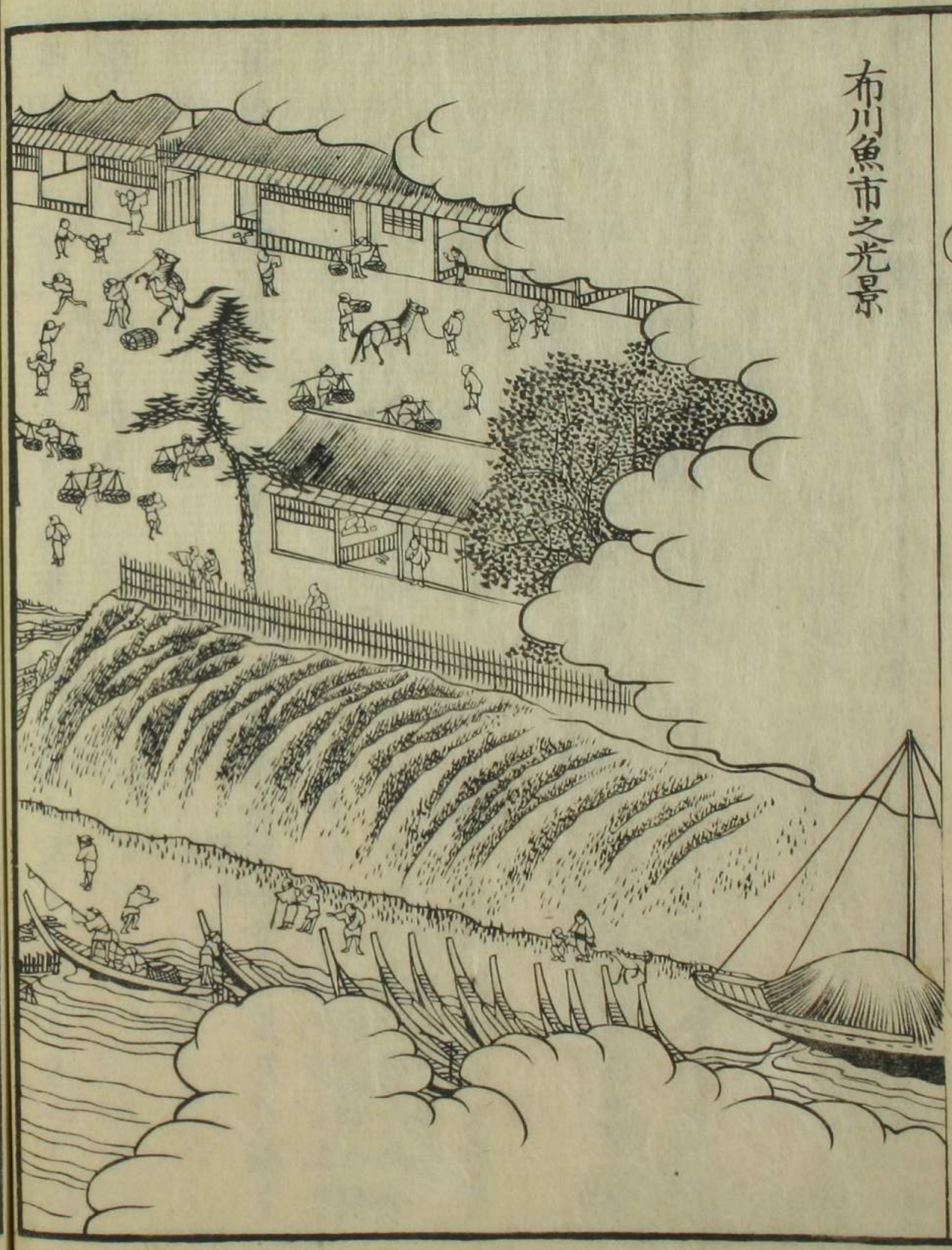
を博む又常陸の鹿島浦より來る龜船希く有り又あまりふし乾
魚は舢舨ふて輸るあり

天候

舟人の最慎む所ハ天候にして就中暴風を前知するふあり而し
て迅く帆を下け苫を覆はざれば或ハチノモノ沈木の方言あり
三秀才洞庭湖の楠木神と不乗りうけマン子ン川岸の邊をいふ
ふ抵りて舟を損し舵を断え若ハ人命を殘ふに至るを以てあり
故に練熟の舟人ハ掌を以て故に練熟の舟人ハ掌を以て
黒雲急不起るハその方より暴風來る微あり曉に黒雲奇峯を爲
すハその方不風行くあり東南風ハ晴ふて西北風ハ雨あり然れ
ども時節不因て差あり
日光山よく晴れたるハ北西風あり
日光山よく晴れたるハ北西風又ヤマデヒハ日曇
りたるハ雨微あり筑波山よく晴れたるハ北東風あり筑波とイ

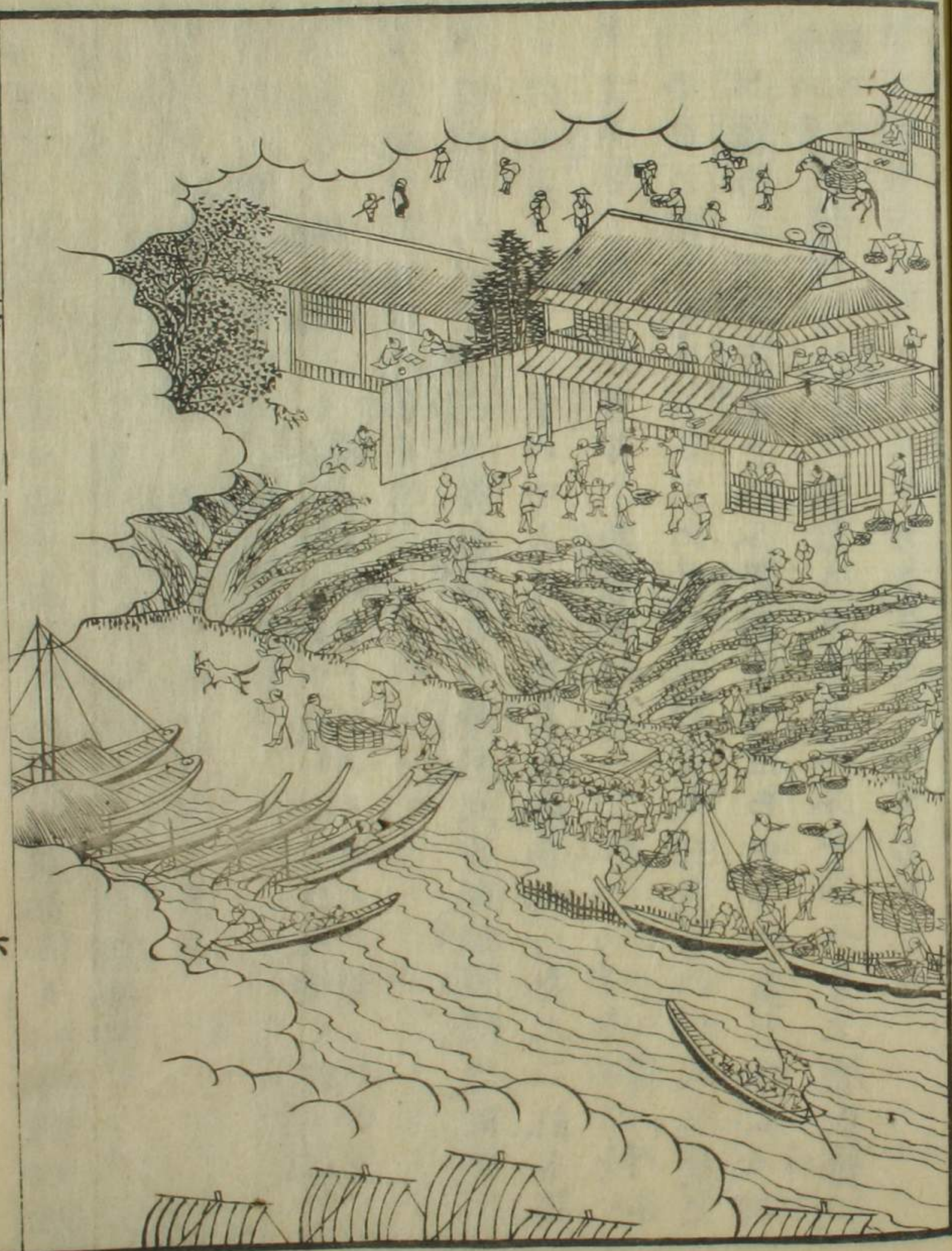
天候

布川魚市之光景



天候

六



雨日ハ晴微トす富士山ハ黒雲あれば西南風ありこれをフジ
南西風ハフジ曇天ハ富士山の晴れると西南風あり
鳥飛下るハ必風ハ向ハ是を以て風の方向を知る
魚高く跳るハ雨低きハ晴あり
耳痒きハ晴の微あり鯉ガとれるといハハ好き事を聞く銚子濱で
星光揺クハ大風の微あり
天經或問云夜星燦躍參星動搖太白晨見此皆風微或繼之雨也
この參星ハ二十八宿の中ハ尤見易き者なれば舟人これを認
めて準トす故ハ方言多ク物類稱呼卷一ハ參ハ二十八宿の内ハ
り中星の横ハ連リなる三の星を江戸ハて三光といハ又三星ト
いハ關西ハて親荷星といハ東國ハて三ちやうの星と呼ハ今按
所の音武藏國葛西ハてさむろ不トといハトハ上原氏藻汝
草ハ蝦夷方言を記してヲガンヂといハるも是あり

參星ハ續きて準トする者ハ昴宿あり物類稱呼ハ昴ハ二十八
宿の内東國ハて九曜星といハ江戸ハてハ六連星といハトハ
り蝦夷ハてハイロンリコフハトハ
太白星ハ宵の明星蝦夷ハてキンマチスルクルトハハる方長庚
ハトハて曉の明星ニシヤツシヤヲチトハハるハ啓明あるグ共に
金星の別名あり
雨候の事黃子發ガ相雨經ハ常以戊申日候日欲入時日上有冠雲
不問大小視四方黒者大雨青者小雨トハハるより始諸書載する
所甚多一姑一二を左方ハ舉ぐ
武備志卷一百十八ハ海燕忽成羣而來主風雨鳥肚雨白肚風ま
海猪亂起主大風トハハりこの海燕ハ胡燕の類あり觀文禽譜下
條ハ一種高須候ノ藏圖ニ海中巖壁ニアル所ヲ畫ケリソノ形狀
頭臆蹙色ニメ蛇頭ニ似タリ背及ビ翅黒ク翅最長シ翅ノ裏蹙色
紫短脚蹙色ナリトハハる者あり義楚六帖卷十七ハ攝大乘論
紅色脚蹙色ナリトハハる者あり

天候

云少受猶如乞雨鳥西方有此鳥如此方鳩鵲等同と見えたるハ即
この類にて水乞鳥とハ異なり水乞鳥ハ廣東新語ヨ
物理小識卷二云熊公曰竈突發煙平遠望之亭々直上晴之候也蛇
蜒而起如欲上而不得者雨徵也蓋雲將成雨空中氣行皆成濕性煙
爲濕礙不得上升故至宛曲將雨礎潤將雨燈爆理可同觀朝日出尅
黯淡色倉白者雨徵也日出時雲多破漏日尅散射者雨徵也密雲四
布牛羊齒艸如常者不雨若啖食匆遽似求速飽雨徵也蠅蚋蚤蚋
邊啣食雨徵也蠓蝟之屬倉皇飛鶩雨徵也穴處之蟲羣出于外雨徵
也下畧
天經或問卷二云如頭痒耳熱面赤髮潮體燥肢痛鳥雀翻飛噪空圍
舞魚出跳躍羣蟻出穴蚘過路蛇曝日石脉潤樹汗流琴聲不清鼓音
不亮燈燄搖閃燄爆有聲此皆風雨之先徵也

物産

利根川に産する魚鳥及び兩岸に生ずる草樹極めて多しその主
たる物江戸海に入る方ハ鯉を以て一銚子口の方ハ鯉魚を以て
すこの書余が郷里を先とするを以て爰は鯉魚を説きその餘の
物産ハ粗これをいふ
鯉魚ハ朝鮮名にして東醫寶鑑卷二十一に見え日觀要攷よと鯉
魚と注せり鯉ハ和名鈔卷十九に載せたる鯉の誤にして本義ハ
フグナリ山海經卷三赤鯉の郭注に今サケは非ずされど通用に
ハ鯉を用ゐるも可なりある儒者よりフグの可否を問ふとて鯉
の思ひて可と答へたるより食ひて中先哲或ハ鯉魚松魚過臘魚
り困ミ一事の能く知りたる談あり先哲或ハ鯉魚松魚過臘魚
さど書くるハ非なり又この魚功能多し粗左方は擧ぐ
無住法師雜談集卷三云聖武天皇東大寺御建立アツテ三面ノ僧
房ニ學問スル僧ヲ夜中ニ田舎ノ夫ノ形ニ御身ヲマツシ蓑キ給
ヒテ御覽ジケルニ或僧アスヨリ後ハイカバスベキト歎キケリ

物産

サシノゾキテ何事ヲ御歎アルト問ヒ給ヘバ此日比鮭ノ頭ヲ舐
リ舐リシテ學問シツルガ舐リ盡シタリトイフナド、問ヒ給ヘ
バ鮭ハ目ノ眠ラレヌ物ニテ頭ヲ舐リ舐リシテ目ヲサマシテ學
問シツルト云ヒケリサテ越前ニ鮭庄トテ鮭トル庄御寄進アリ
ケリコレ學問ノ爲ナリ

一本堂藥選下編云。乾過臘魚溫體破瘀血治婦人腰冷血閉產後瘀
血諸疾發諸瘡瘍及鬱氣結毒。

又云。此邦中古醫人必處過刺葛刺葛氏等數品稱調血劑舉治衆疾
葛刺即乾過臘魚是也。今也方法並失幾少識之者用者亦至稀。只煮
食滿腹耳。嗚呼其溫體破血之効迥在芎歸之上。古人用之其有旨哉。

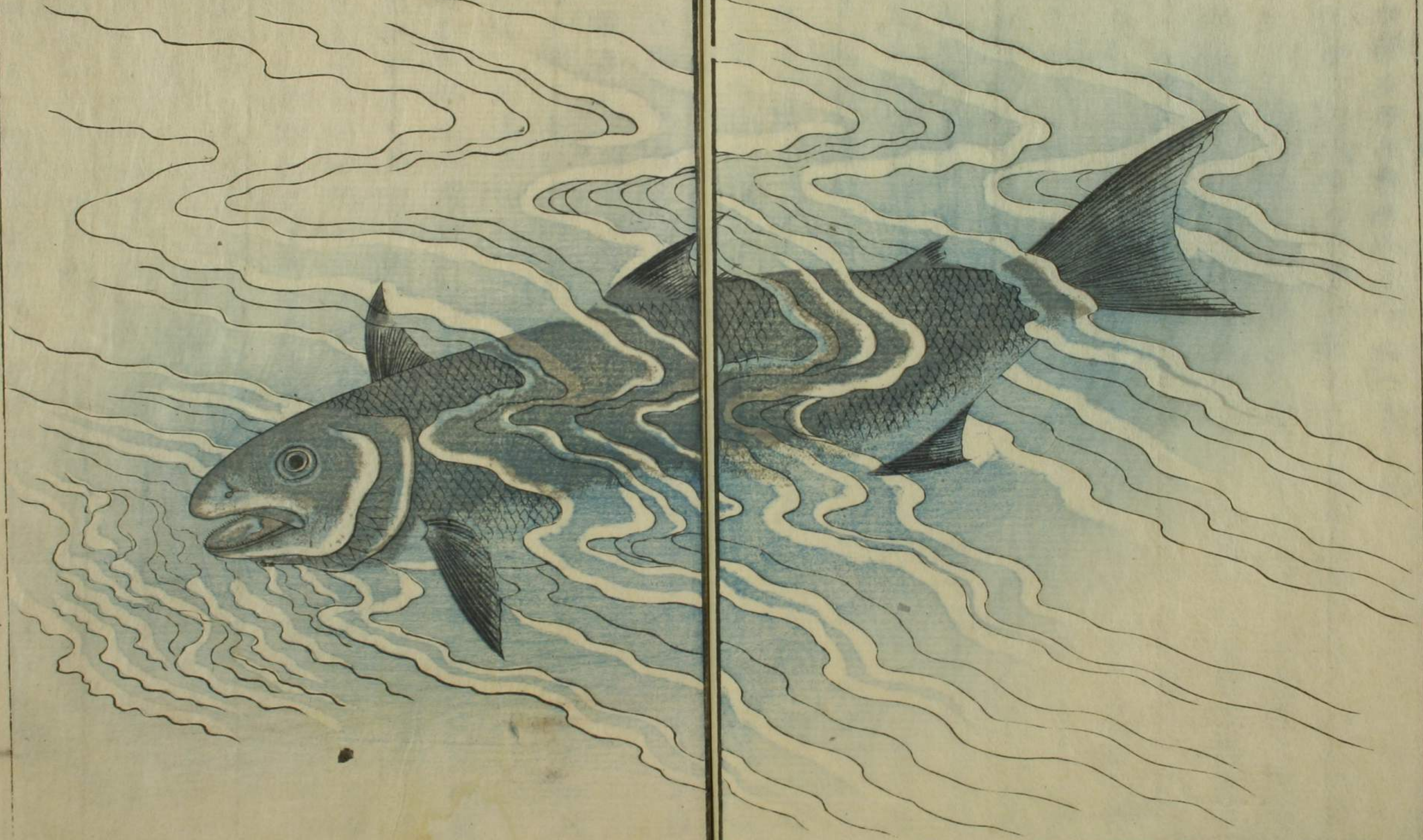
和漢三才圖會卷四十八云。產後金瘡藥。干鮭。阿羅魚共黑燒存性

藜アカガ 萍蓬草タフホ子 小角豆サハゲ 沈香燒不出煙 以上六味分量有口傳

松浦弘西海雜誌卷二云。牛深湊ハ天草の西の果トテ南ハ薩州

長島と海上纜ト三里許を隔つ西ハ滄海渺茫トシテその限を知
りず予この處ト一宿を求めトその家の爐上ト何とも知れぬ
枯魚を梁より繩トてつりさげ煤ト黒トまるが見えざるを怪
て主人ト問ひト一鮭ありト答ふるトぞ當所ハ漁者のミあるト
かくまで陳く畜ヘおうる、事不審ありトハハ主人曰くこの
濱トて鮭を得る事甚稀ト一ト漸五年十年目ト一ト二トを捕ヘ得る
事ありそれを此の如く貯ヘ置く事ハ金瘡火傷の藥ト用ゐるカ
リトハ程年久き魚トても火トて炙レバ油自湧出つるありこれ
を疵口ト塗傳るト効能神の如く痛を止め肉を生ず故トこの里
トて偶捕得る時ト一尾を五軒十軒トも分畜ふるありト乃ト
おろさせて熟く視るト北國トて漁りざる者と少ト異なる所カ
ト北海邊トてハかゝる能ト聞クざりト西國ト來リテその奇
効を知得るハ奇ありトハハ

物産



十

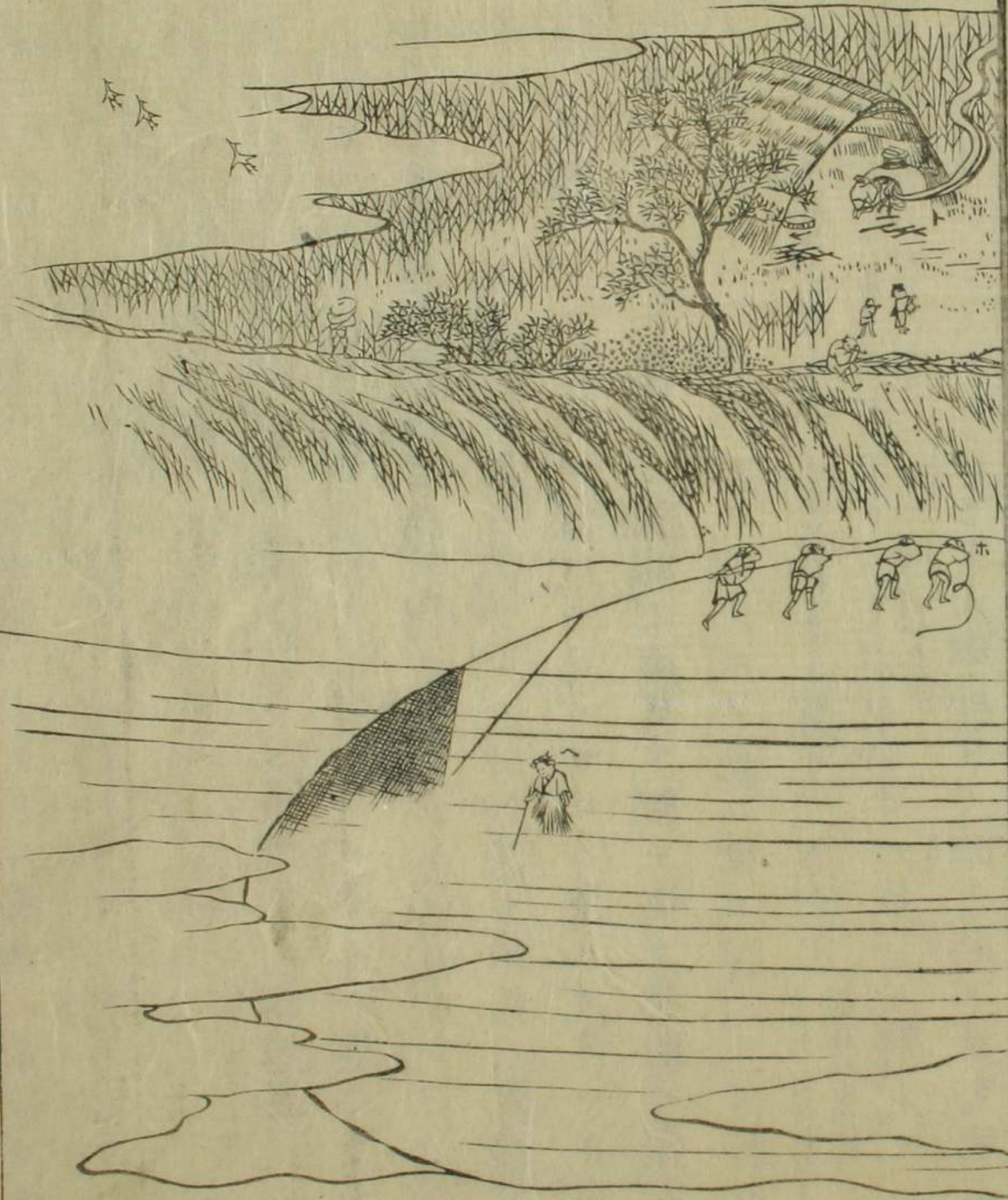
利根川に於て鯉魚を漁するハ毎年七月下旬より十月下旬まであり
鉾子口より入り利根川を洺り絹川も分れ上り川上至て
卵を生む北越雪譜初編にいへるが如し利根川の鯉魚ハ布川
を以て最とすこれを布川鯉といふ鉾子口より小見川息栖まで
ハ潮水洺る佐原も猶鹽氣あり故にその肉赤色薄く味甚劣れり
これより淡水を洺る事六七里安食村至て味佳ありこれより
三里上りて小文間至るこの間の漁を布川村の有とすこの處
鹽氣全く去り魚肥之脂つき肉紅にして臙脂の如く味亦冠り
これより以上ハ魚疲れて色味益減す故に味の美惡ハ肉色の深
淺を以てこれを分つ
これを漁するハ大網待網打切歩掛無相流イクリバカヅキこれ
等ハ網あり又措て鏝きてとるをヤスツキといふ
中下利根川に於て秋彼岸の頃鯉の登りむとする小先とちて白

蛾 群一上流に向ひて飛ぶ日出て、後死し落ちて水面布の
如し此の如き時ハ當年の漁多きをトして盛に漁具を備ふこの
蟲少き時ハ獲亦少しその形蝶に似て身長六七分頭二白鬚あ
り長五六分尾二毛あり長一寸三分羽左右并せて一寸許白
色柔軟綿の如し卵時頃より出で水面一尺許の上を飛ぶこの間
十日許鮭登る至て盡くこれをサケムシといふ即和名鈔卷十
九ノ蜻唐韻云蜻音誘漢語抄朝生暮死虫也藻鹽草卷十二云蜻ひ
ふ死すトオウありトヒ一へる物ト一名アサガホ詩經名物大坂
毛詩品サケコ越後名寄サケベツタウ同サカベツタウ北越雪譜
初編又ベツタウハ蝶の方言ある由をいへり鮭ト因ある蝶ハ
まかへる即廣雅釋蟲小朝蜻孳母也といひて一名朝秀淮南子
高誘注云朝秀朝生暮死之蟲也生水上似蠶蛾一名孳母淮南子
之蟲邪云如蠶蛾トヤウ混じりハ誤かりニの朝菌ハ類
と菌者云りサレバ本草綱目不混じりハ誤かりニの朝菌ハ類

子道遊篇不朝菌不知晦朔亦必謂朝菌之蟲者微有知之物故以
の事とて此云不知晦朔之物何須言不知也訓爲芝母上蟲邪同
齒者失之矣若草木無知之物何須言不知也訓爲芝母上蟲邪同
白露蟲爾雅翼霞姑霞字貫提要卷四十四條考此蟲之落
一書ふこの蟲出づる時速舟を乗出さし中ふて藁火を焼く
時ハ悉くこれ不聚り羽を焼かれて落つるを採りて香餌と爲す
時ハ魚多く得りるといへり
鱧魚の漁始まる時ハ鴨跖草雞兒腸の花兩岸を點綴して秋間の
美景と稱する不足れりこの他動植の記載すべき者甚多し
ヨシタケ蘆を刈りたる濕地の芟株不生す乾地ハ生せず蓋狀
獨立色白一或ハ黄を帯び或ハ微黒を帯ぶる事あり四月多く生
む味朴樹菌の如し又乾して貯ふる者あり即本草の萑菌あり
ヲギかれど散文にて按ずるに説文卷二不突菌突地萑叢生田中
通ハ一いふものなり
从六聲とある文の繫傳不從中者象三菌叢生也易夬卦曰覓陸

夬夬陸即突也與覓皆爲柔脆之物夬字從此といへるハかゝる物
不してさる處の漸固まりて平地とあるから不陸字これ不从へ
るあるべし夬ハ説文二十六不土塊夬也といひ陸ハ同二十八
不高平地と注せると漸不成固まる狀不因れる者又四月頃蘆
ふかりざるを刈り積みて田は培せむとする者の雨ふ朽ちざる
が上ふ生ずこれハ色味全く同じれども朽ち易く貯へ難し
惠具は古より説々有りて詳ならずこゝ不井ゴといふ草黒白二
種有り白井ゴハ野茨菰の小かる者その根ハ簽くして食ふべし
りずされどその葉ハ食ふべき狀ありさらば惠具ハ簽の義ある
る黒井ゴハ烏芋の小かる者即救荒野譜卷上の野芋薺なり本草
卷八の水豆兒ハこれ亦二種有り水氣多きを米井ゴといひ少き
を糲井ゴといふ共に味甘し
小々妻茅に似て小かり原野濕地不生す葉中ふ脊あり長三尺許
秋枯る採りて蓑まゝ苦不製る一名廿、三ノ
大和本
草卷九即爾雅義疏

物産



鱈魚大網の圖

網を舟に積み、橋入高入船頭に繫入網打入大率
 空人少て舟を走りせ川より網を打廻しよりさりを圍
 岸小治ひて下り川下を引廻し、傍の砂より引きあげて
 るより網長七間より白間に至り幅八九尺より丈三を
 け川の流れ深廣狹に従ふなり
 一魚屋網元 口は蘆原の中かすりふ人行き通
 する處なり 二代に網を纏ひて引くなり
 本網を挽き畢て後或ハ網中に
 取以てさけを打つ
 へ手に棒を持ち網さかりたき
 の頭を打つ
 ト食を調ふる小屋

の類絲莖類雅卷八ノ類莖莖とある文の義疏ノ廣韻云莖莖

類絲莖野人刈取爲索柔韌難斷其葉如茅而細長有毛而澀莖莖聲相轉也見ゆ郭注莖莖河苔和名加波奈立成云水苔一名古

今集物名歌のかハかぐさと同物トハ見之されど何の物トモ知

清絢孔雀樓筆記卷四ノ湯火傷ヲ療スルニヒルモトイフ物ヲ

砂糖水ニテトキ傳クル用井試ムルニ神効甚シ伯氏ノ乳母大ニ

火傷シ面腫ル、ト甚シク眼口モ見エガルニ至ルカノヒルモヲ

傳ケタレバ一夜ニ痛止三腫減ズ兩日ヲ經テ全ク平生ニ復ス一

通ノ湯火傷ニハ一塗ノ晡ヲ待タズメ愈ユ世ニ澤山ナル物カク

ノ如キノ至効アリトハへる話ヨリ有りてきこゆ十六島邊ノ

疵不傳ケ用ゐるも由ありすべて神代ノこの草余ガ卿ノてハメ

故事を荒唐と思ひ捨つるハ狡意あり

グスリハといひて田を耘る者大率採りて腫貼ト目を明ス

熱を去るといハ物類稱呼卷三云眼子菜畿内及び北越ノ

てびりコトといハ奥ノ津輕ノてびり物トハ田夫採りて腫

又食傷を治する事諸書不見之リ救民妙藥食傷并毒解餘ノ

醫療手引草別録上卷ノ道三金屑丸トモ草トハ漢名麝舌

把葉湯をあけて若欲吐不吐者ニハ加ヒルモ草トハ漢名麝舌綱本草

物産

十七

鷹尻刺和名鈔卷二十ノ藺ノ混ド説ひされど余ガ卿ノて見

ハ一名尻刺草針草トハひて藺ノ混ド説ひされど余ガ卿ノて見

湖葦交在草知草トハへるもこれあるべく覺ゆ

鱧魚余ガ卿ノてサヨリトハ異魚贊閩集ノ無唇ありハ即兩國

橋邊のダツあり魚ノ精ノき人より余ノ事をハ行ハ水漲の

の時多く上る形銀魚いりうまの如くにして下喙くちばし夫り長し身長六七寸喙一寸許銀光あり脊骨せねくろ黒く見ゆ八丈島にてフツチといふと是かるべし

カツバといふ物本草綱目の水虎附録 溪鬼蟲ありといへど正しく當れ

りとも見えぬ逸周書王會解不穢人前兒良夷ハガイシ在子とある文の注

不在子ハバツ鼈身人首スガ脂其腹多之ハハラ霍則鳴曰ヤマワロ在子といへる物やそれち

らむをハとまれかくまれ望海マシ毎談ハ刀祿川ハ子ハコといへる

河伯カハあり年々ハその居る所ハ變る所の者どもその變りて居る所

を知るその居る所ハてハ人々も禍ハありといへりハげハカハの害

ある談多しハ牛山活套中卷ハ筑紫ハ方ニハ河伯ハ邪祟多しハ金銀

花ノ煎湯ハヲ用ハテ神効アリといへり試むべし

手指ハを截断ハしハるを接ハぐ藥の方をカツバより受けハるといふ事

いかでと思ひハが若ハハさる事とや有らむ一事左ハに記す堅瓠ハ廣



集卷六云。耳談黃陂江尉解銀赴京。遇盜截去二指。抵京已五日矣。延醫但求已痛。有仇總戎門下醫人曰。是可續也。斷指幸爲從人拾得。卽取合之。層々塗藥。仍夾以薄板。戒三七日勿近水。及期果合。屈伸如故。但有紅線痕。傾索得三十金。酬之兼有其方。用片腦象牙末降香諸料。かゝるさまの事ども求め出づるふもふ不

おもふ事利根の川ふといくうへりゆゑん草よひひとくさす
みちのくはと不ーときくをいふれバこの事をいいてーのふや

